

# News Release

---

報道関係者各位

2016年8月24日(水)

## 体育会学生の就職活動状況(2016年7月調査)

株式会社アスリートプランニング

体育会学生の就職・キャリア支援を行う株式会社アスリートプランニング(本社:東京都新宿区、代表取締役社長:山崎秀人)は、『アスリート就職ナビ 2017』を利用する体育会学生の就職活動状況に関して調査を実施しましたので、結果をお知らせいたします。

---

### <調査概要>

調査対象:「アスリート就職ナビ 2017」利用中の体育会学生

有効回答数:459(99大学)

調査方法:Webアンケート

調査期間:2016年7月12日~7月19日

### <主な調査結果>

- 77.8%が「就職先を決定し活動終了」
- 56.6%がインターンシップに参加
- 91.1%が学内で行われるセミナー・ガイダンスに参加
- 19.5%が部活の先輩や監督・コーチ経由で選考を受ける
- かかった費用は平均11万7,000円、最大は50万円
- 49.9%が「継続力・諦めない心・粘り強い」をアピール
- 29.4%が「交通費などの費用」で困っている

### <本資料について>

本資料に掲載のデータ、図版等の利用やご質問等に関しては、下記までご連絡ください。

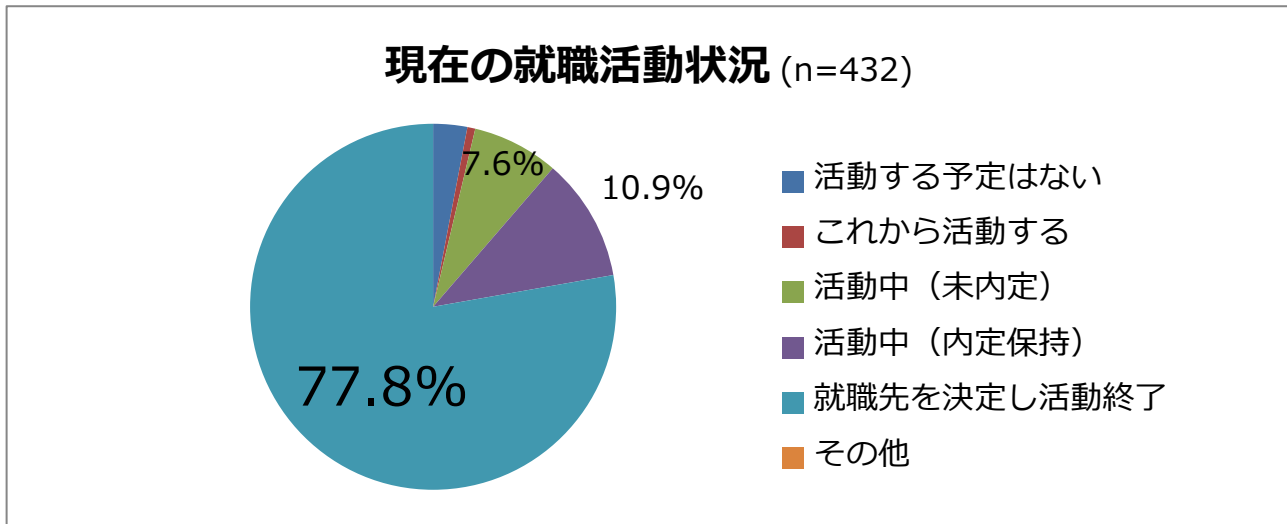
### <本件に関するお問い合わせ先>

株式会社アスリートプランニング 広報担当

Tel: 03-5937-8460

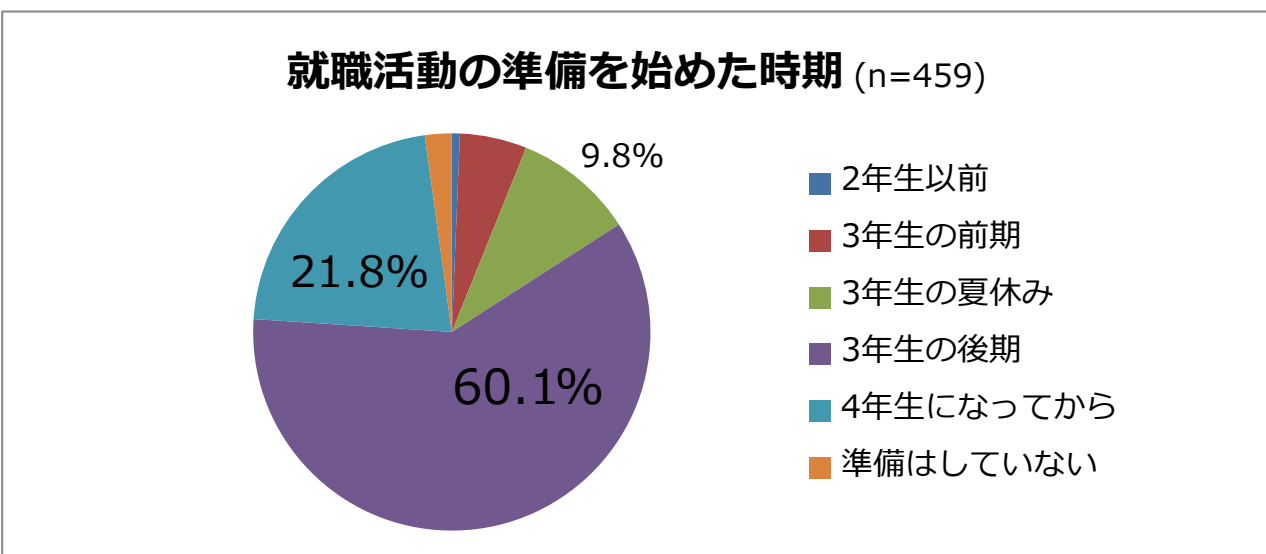
### (1)約 8 割の体育会学生が「就職先を決定し活動終了」

7月19日時点で、77.8%の学生が「就職先を決定し活動終了」という結果になりました。内定を保持している学生を合わせると約9割となり、「活動中で内定なし」は1割未満となっています。なお、活動予定がないと回答した学生は学校推薦や指導者からの紹介で就職が決まる見込みであることがほとんどで、体育会の経験やネットワークを活かすことで、就職活動をしなくて済んだというケースになります。「これから活動する」と回答した学生に理由を尋ねたところ、「部活動が忙しく、活動時間が取れない」といった背景があり、体育会ならではの課題が存在することが読み取れます。



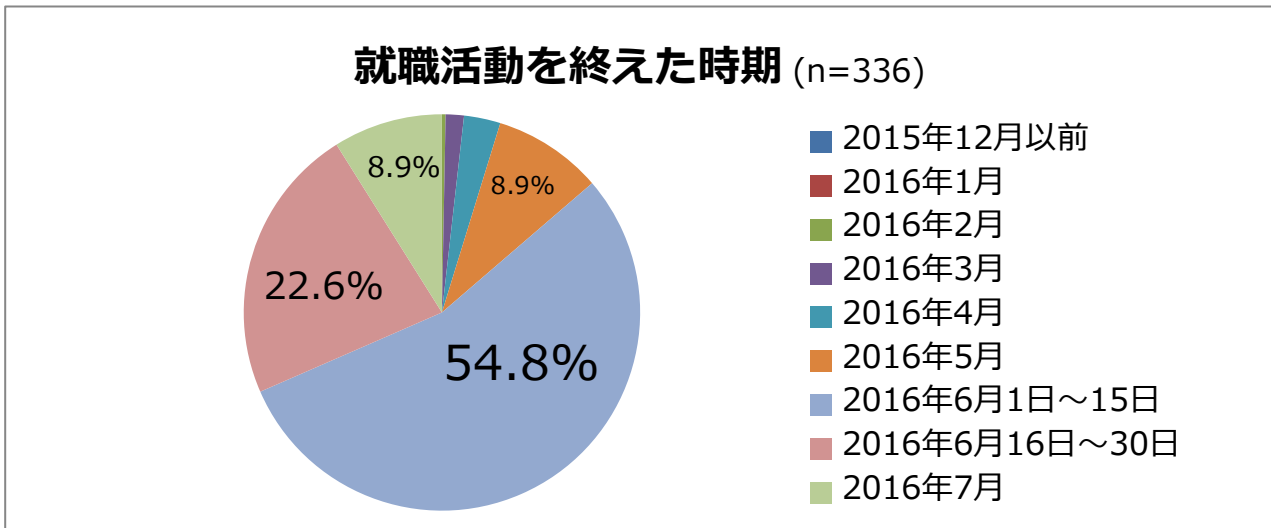
### (2)体育会学生の6割が「3年生の後期」から準備開始

60.1%の学生が、3年生の後期から就職活動の準備を開始しています。2016卒学生のデータと比較すると、若干ではありますが3年生の夏休み以前に準備を開始した学生が増加しており、体育会学生の間でも就職・キャリアに関する意識が高まっていることが考えられます。また、競技によっても活動時期に差異が見られ、たとえば冬季に本格的なシーズンを迎えるスキー・スケート等の競技では、他の部活動と比較して3年生の夏休み以前に準備を始める学生が多いという結果になりました。



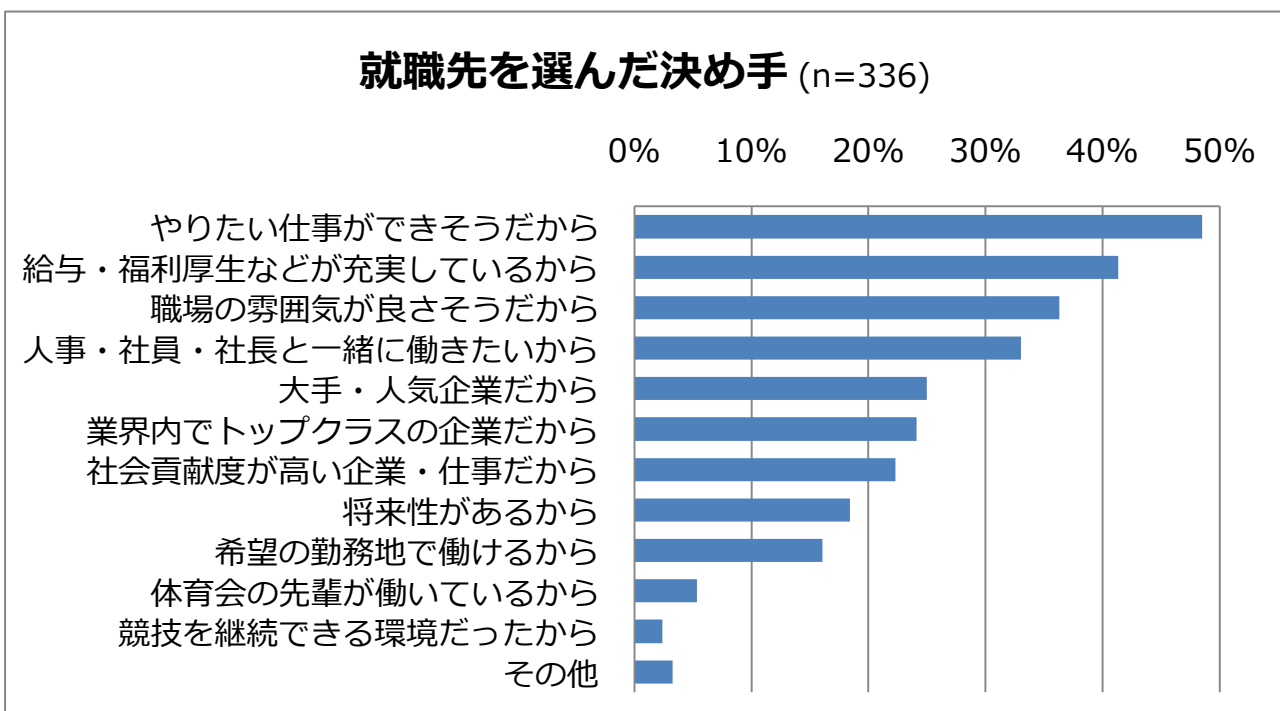
### (3)6月上旬で半数以上の体育会学生が活動終了

選考スケジュールが変更となった影響で、6月に就職活動を終了した学生が77.4%となりました。中でも、6月上旬に終えた学生は54.8%にのぼり、大手企業を中心に短期決戦となったことが窺えます。8月は合宿・大会のシーズンとなるため、多くの体育会学生にとっては6月選考のほうが動きやすいようです。また進路決定後、速やかに部活動に復帰することが可能になり、最後のシーズンに集中できて良かったという話もあります。活動中で未内定の学生は、活動を終えた学生と比較して4年生になってから準備を始めた割合が最も高く、準備開始時期が活動終了時期に影響すると考えられます。



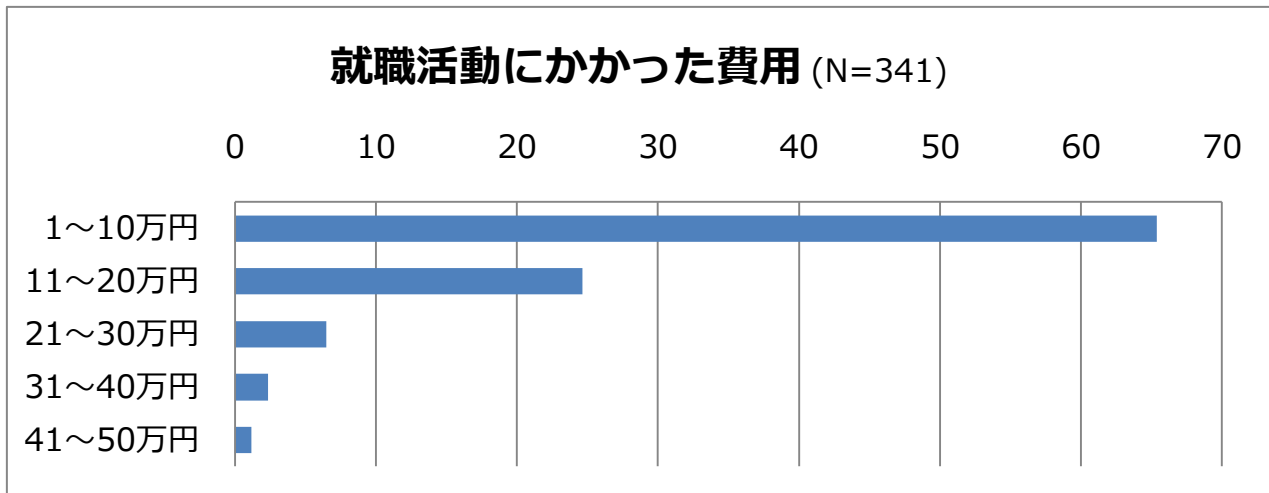
### (4)体育会学生の決め手は「仕事内容」「雇用条件」「職場の雰囲気」

昨年に続き、仕事内容がトップとなり「給与・福利厚生充実」「職場の雰囲気」が続く結果となりました。体育会学生は売り手市場における自らの価値を実感し、雇用条件という形で自分たちを高く評価する企業に好感を持つと考えられます。



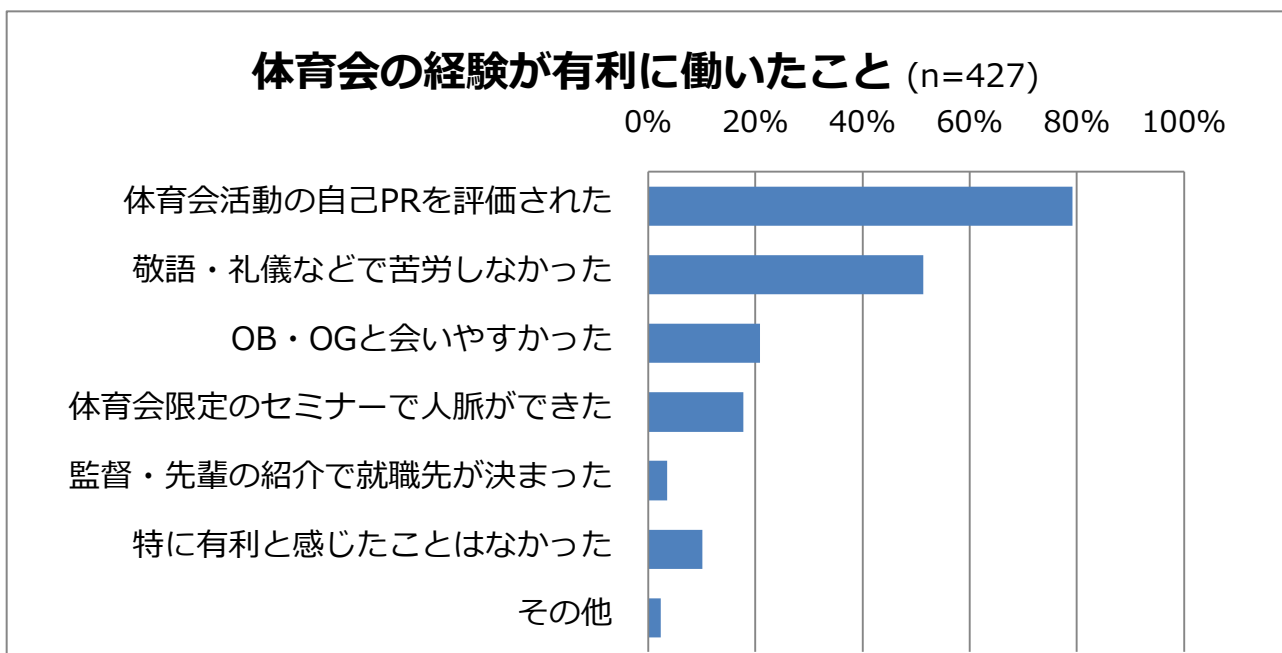
### (5) 体育会学生が就職活動にかけた費用の平均は「11万7,000円」

交通費・宿泊費・食費・書籍代・スーツ代など、就職活動にかかった費用の平均は「11万7,000円」となり、昨年と比較してやや低下しました。体育会学生は部活動や講義で忙しく、アルバイトをする時間がありません。また、グラウンドなど設備の関係で遠方にいることが多いため、説明会や面接に行く企業を見極め、絞っていると考えられます。体育会学生を高く評価する企業が増えるほど、この傾向は強まるように感じられます。



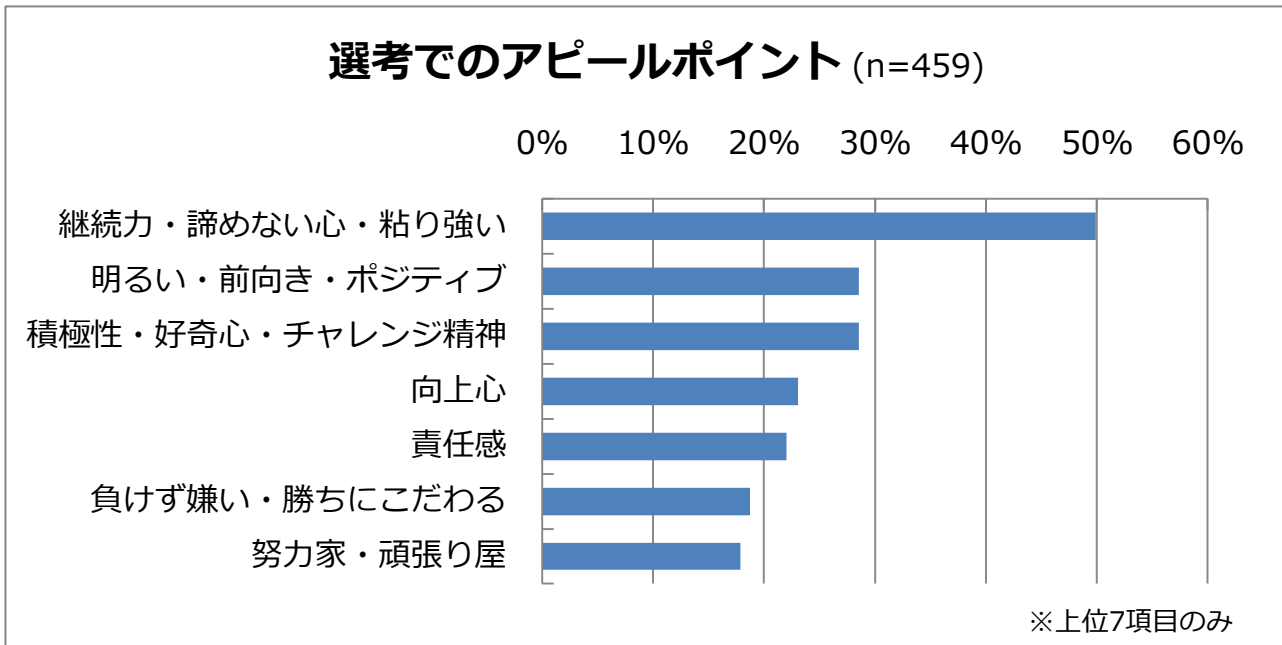
### (6) 体育会学生は自己PRのネタ作りに困らない

約8割の体育会学生が、「体育会の自己PRを評価された」と回答しています。体育会学生は、部や自身の目標を達成するため日々、努力を重ねています。その経験をきちんと伝えることができれば、自己PRで高い評価を得ることが可能です。部活内での先輩・後輩の関係や指導者・外部関係者とのやり取りも多く、体育会学生は入社後に研修で学ぶような素質が、自然と身につけていると言えます。



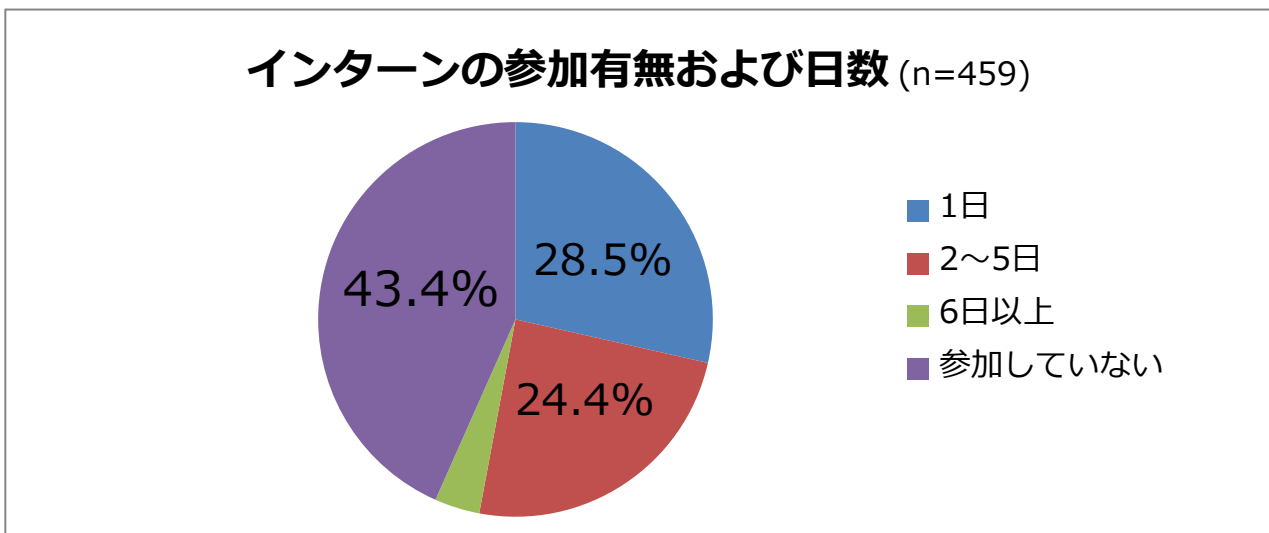
### (7)選考で最もアピールした点は「継続力・諦めない心・粘り強い」

体育会学生が選考においてアピールしているポイントは、「継続力・諦めない心・粘り強い」が49.9%となりました。体育会学生の多くは幼少の頃から競技を続けており、何度も退部を考えたことがあるという話をよく聞きます。そのたびに、自らがスポーツを始めたきっかけや周囲の人々の期待について考え、乗り越えてきた経験を持っているため、入社後も様々な困難を乗り越えていってくれるという期待が評価につながるようです。



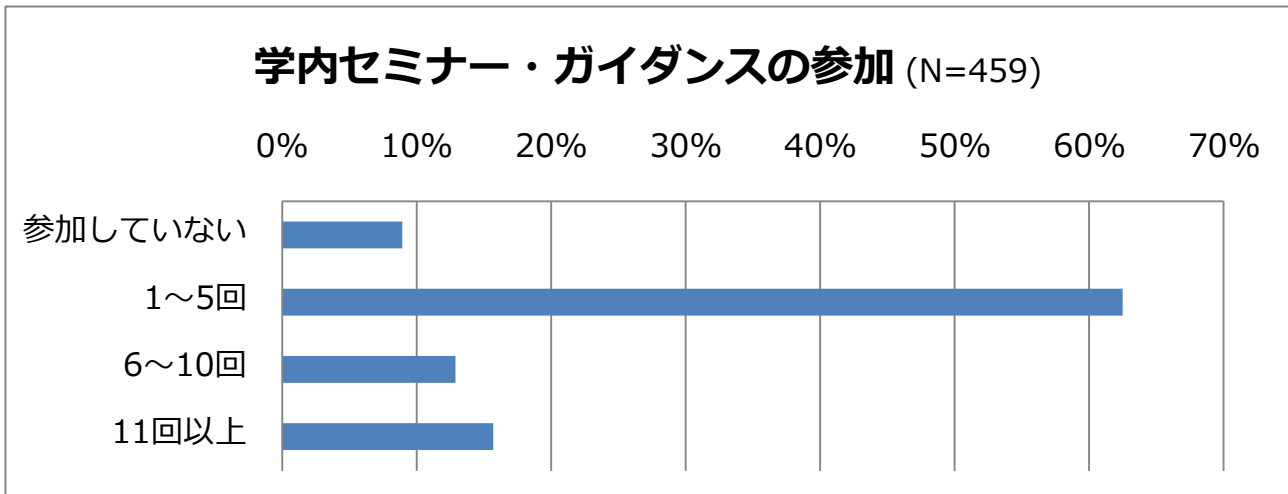
### (8)半数以上の体育会学生がインターンシップに参加、部活動との兼ね合いが懸念

インターンシップに参加した体育会学生は、56.6%となりました。約半数が1日のプログラムに参加しており、週5~6日の練習がある体育会学生にとっては、2日以上プログラムはハードルが高いと考えられます。中には、部活動を休んでインターンシップに参加するケースもあり、本人にとっても部にとってもマイナスの影響が出てしまうことが課題です。



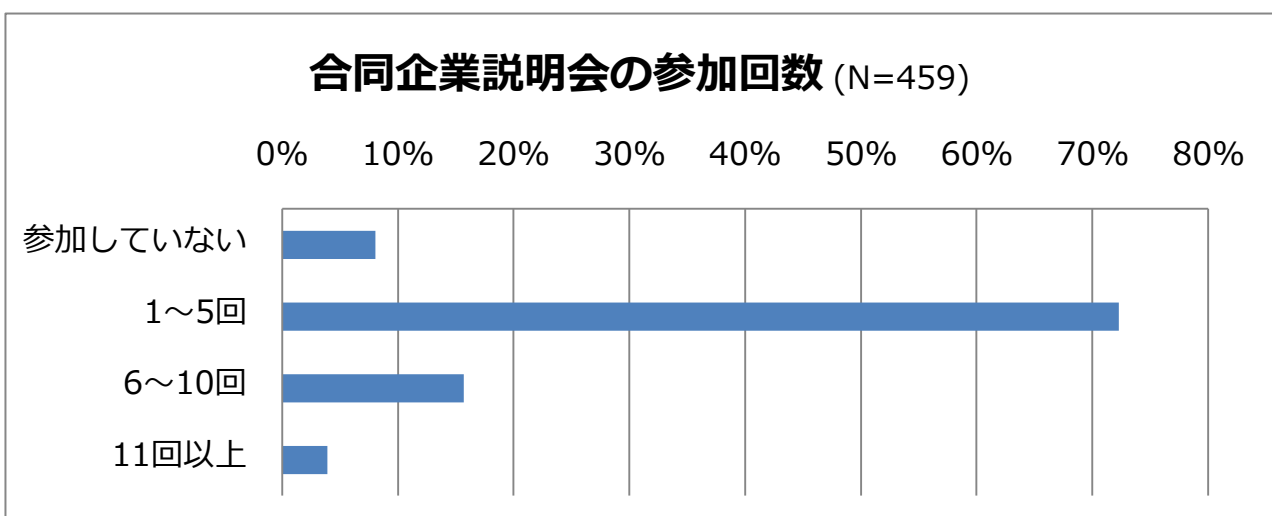
### (9)学内開催のセミナー・ガイダンスには参加しやすい

91.1%の体育会学生が、学内で行われるセミナー・ガイダンスに参加したことがあると回答しています。大学によっては、全学生の参加を義務づけているところもありますが、スケジュールさえ合えば比較的、学内で開催されるものは参加しやすいようです。しかし、ここで話される内容は全学生を対象としたものになるため、部活動との両立など体育会学生にだけ役立つ情報は別途、先輩や専門家から聞く必要があると考えられます。



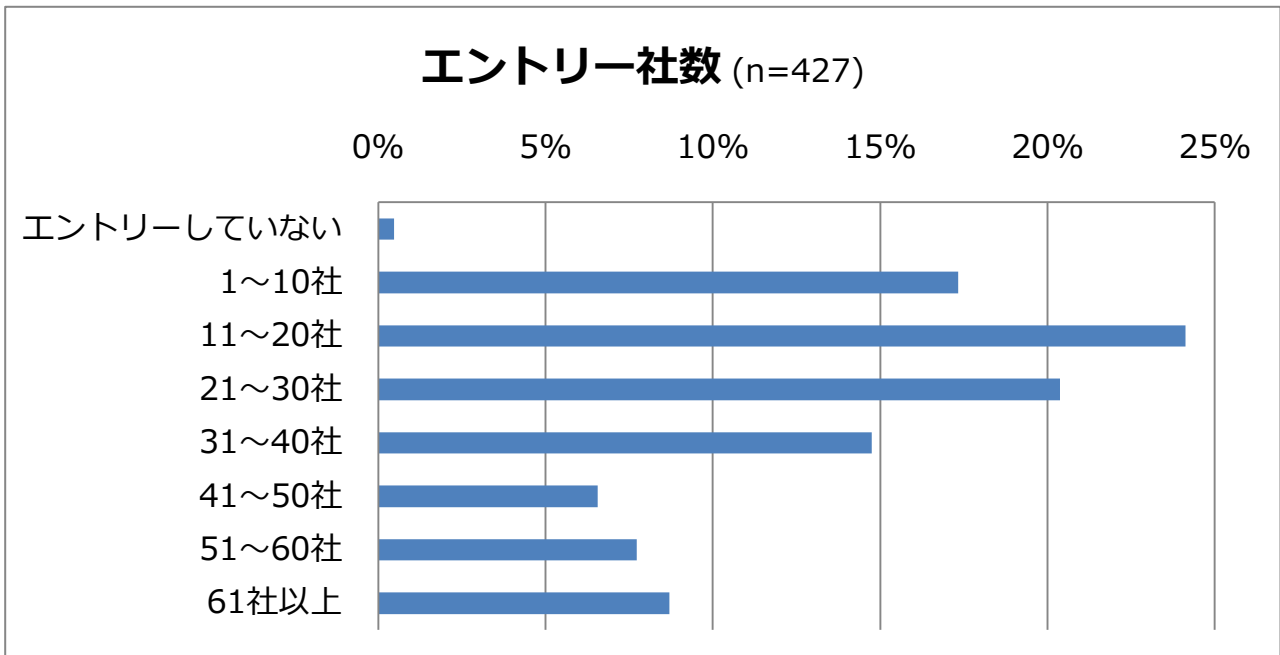
### (10)外部イベントはスケジュール・内容を見極めて参加

学外で行われる合同企業説明会には大半の学生が参加しており、その多くが「1~5回」と回答しました。早期イベントは週末に開催されることが多いですが、体育会学生は大会・試合が入っていることが多く、その結果次第で参加可否が決まるため、回数が限られます。したがって、体育会学生はイベントの内容を見極め、自分たちにとって最も有益であると思われるものを選んで参加していると考えられます。合同企業説明会で出会った企業はその後、個別説明会への参加を促すケースが多いため、スケジュール調整が再度必要になり、体育会学生にとっては負担となっていることも課題です。



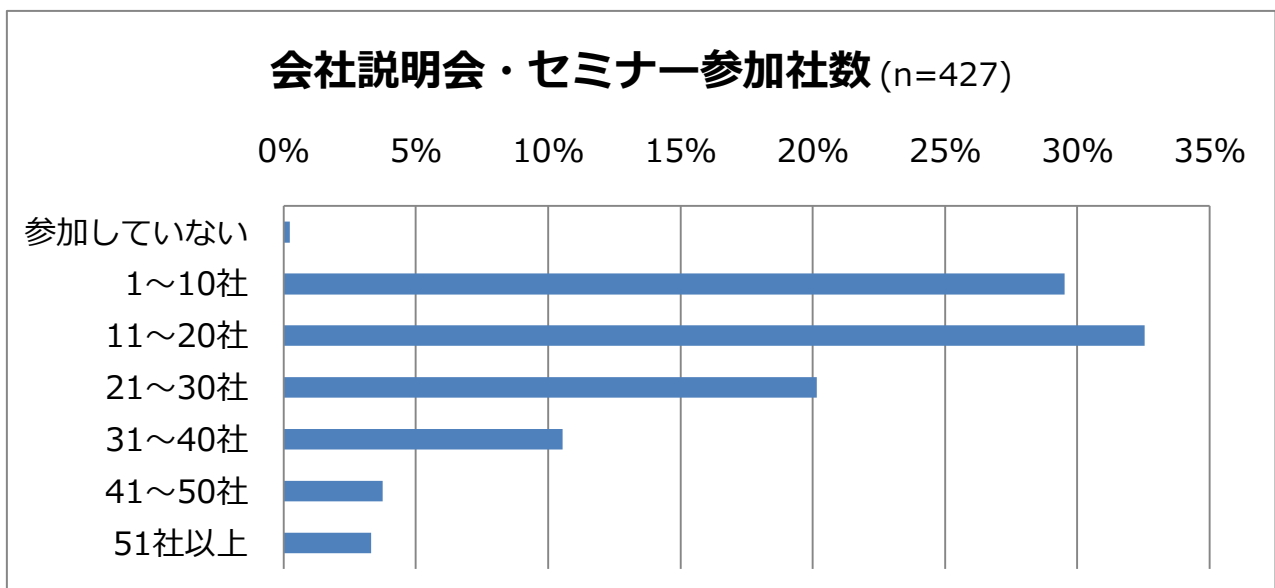
### (11) Web エントリーは「11～20社」がボリュームゾーン

就職情報サイトや、企業の採用ページからの Web エントリー社数は「11～20社」が最も高い 24.1% となりました。前述の合同企業説明会と同様、体育会学生はエントリー後に開催される個別説明会に参加できる機会が限られるため、応募する企業を厳選する傾向が見られます。体育会学生にとっては、エントリー前にいかに良質な情報を収集できるか、効率よく選考に参加できるかが課題となります。



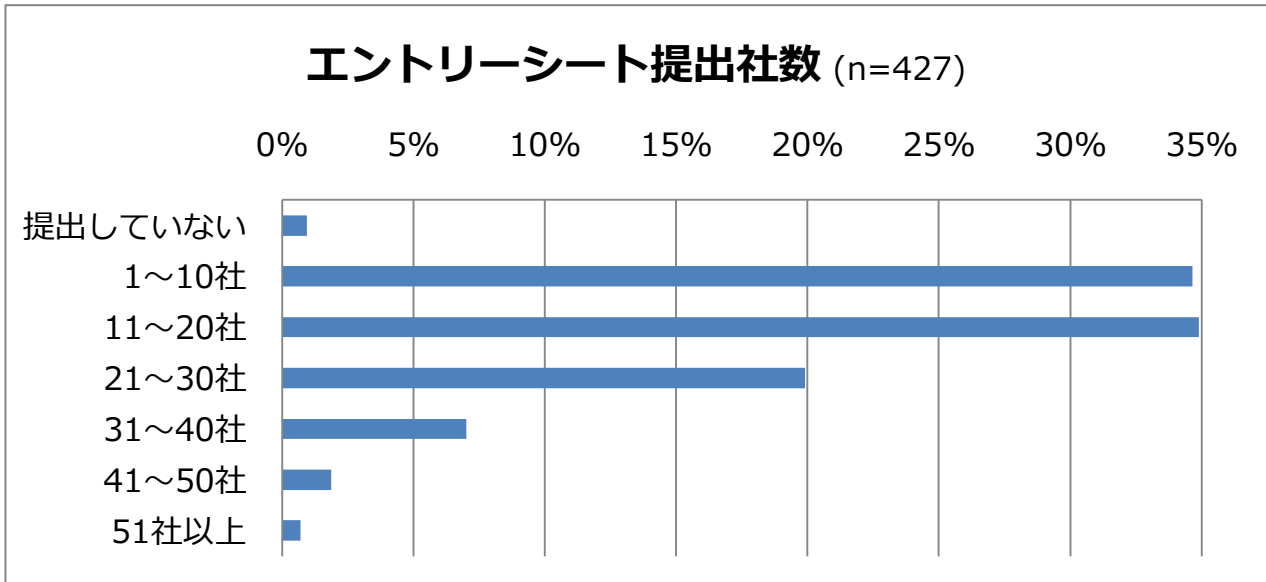
### (12) 会社説明会・セミナー参加社数は「11～20社」が最多

会社説明会・セミナー参加社数は「11～20社」が 32.6% でトップとなりました。Web エントリー社数と同様の結果となり、「大量にエントリーして絞っていく」というスタイルではなく、「対象を厳選し、効率よく活動する」という体育会学生独特の行動パターンが表出していると考えられます。



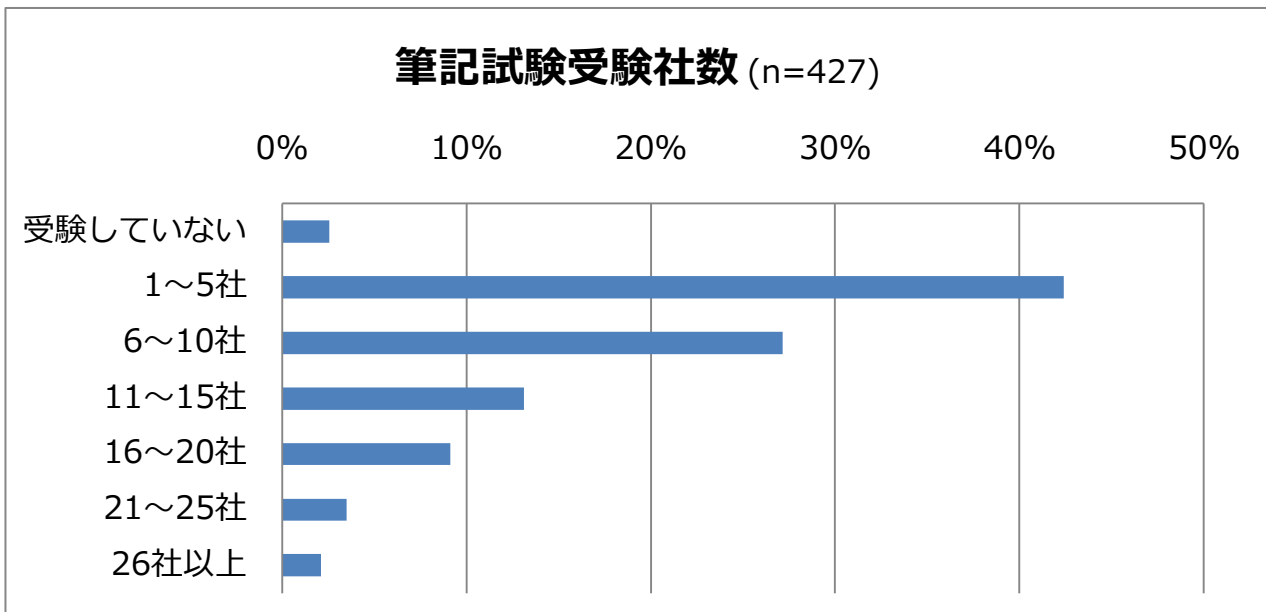
### (13) エントリーシート提出社数も「11～20社」がトップ

エントリーシートの提出は、僅差で「11～20社」が最も多く、Webエントリー・説明会参加と同数となりました。エントリーシートの作成は説明会への参加と同様、体育会学生にとっては相当の負担となるため、練習前後の時間やオフの日を使って作成できる範囲内で、対象を選んでいると考えられます。



### (14) 筆記試験受験社数は「1～5社」が最多、実施しない企業も

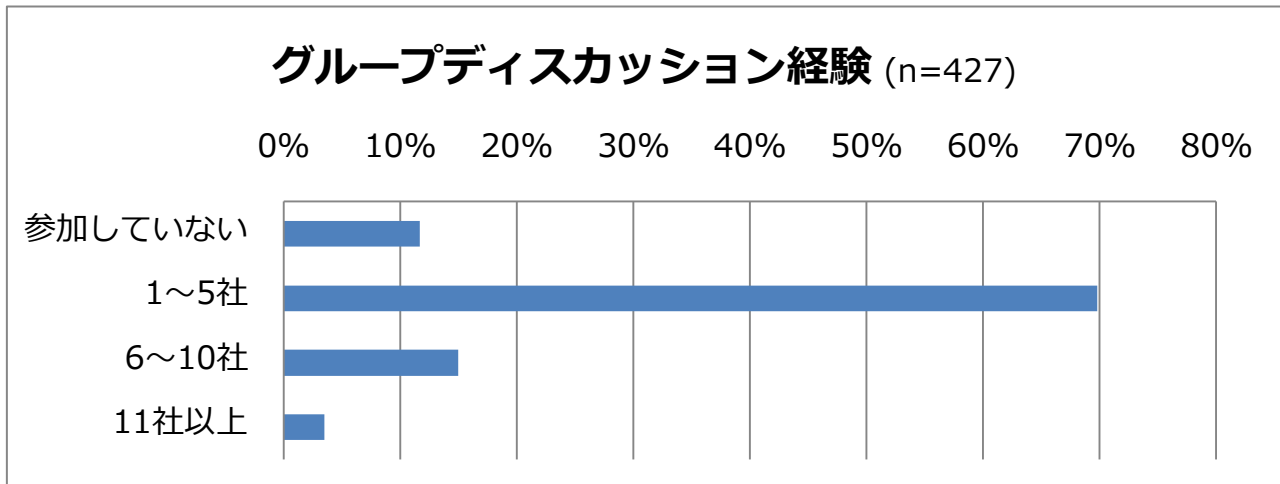
SPIをはじめとする筆記試験の受験社数は「1～5社」が42.4%でトップとなりました。これは、体育会学生が応募企業を厳選していることに加え、一部の企業が筆記試験の受験を免除、もしくは実施していないためと考えられます。高く評価している体育会学生に対し、選考ステップを減らす特別選考ルートを設定することで部活動への影響を最小限にすることができるとともに、企業側も効率的に採用活動を行うことが可能になります。





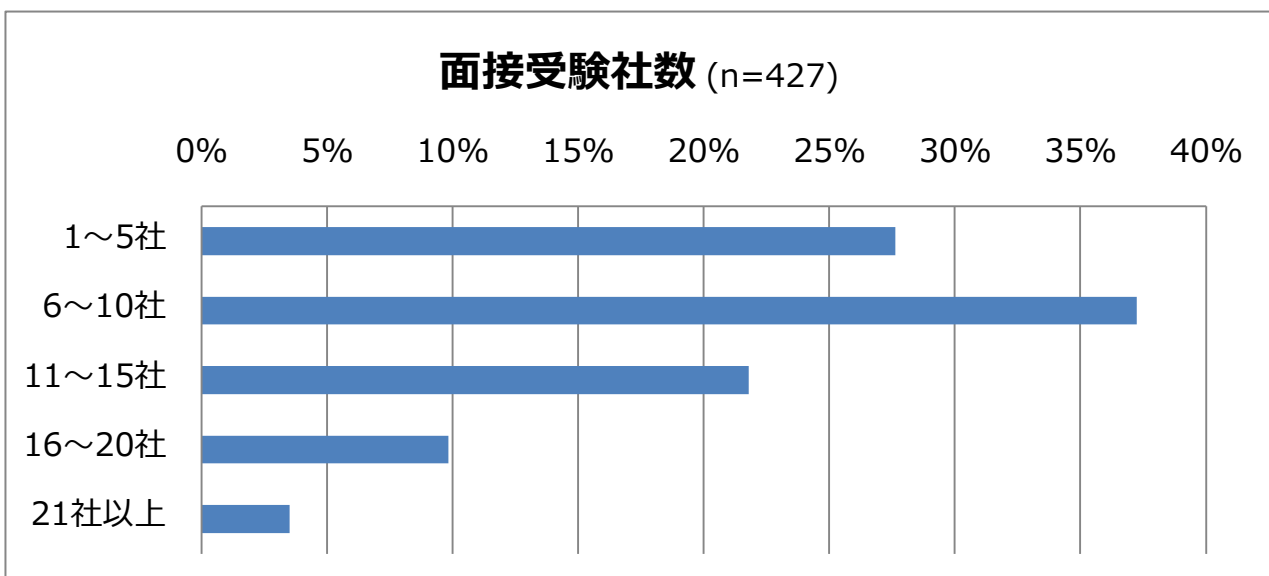
### (15) グループディスカッション受験社数は「1～5社」が7割近く

主に選考の序盤で用いられるグループディスカッションの受験社数は、「1～5社」の回答が最も多く、69.8%となりました。筆記試験と同様、体育会学生は選考プロセスをなるべく減らし、早い段階から面接で判断したいと考える企業が多いと考えられます。体育会学生は選考対策に使える時間が限られるため、ノウハウや経験で伸びる要素に関しては、他の学生と比較して不利になることが多いです。企業にとっては、不慣れなだけで素質のある学生を不合格にしてしまうリスクを抑えたいという思惑があると考えられます。



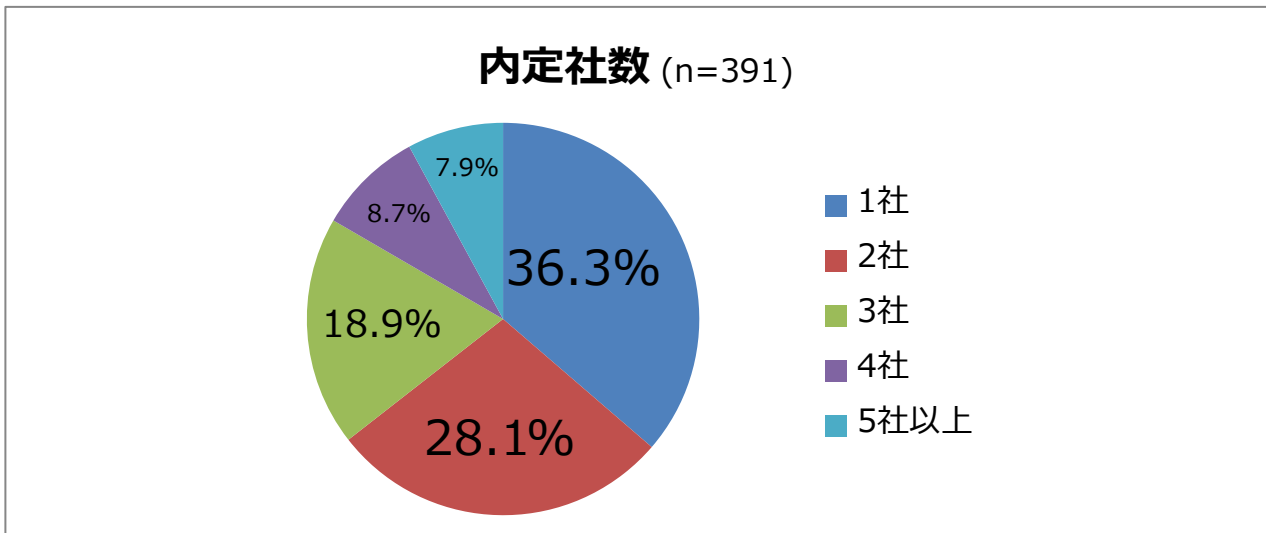
### (16) 4割近くの学生が「6～10社」の面接を受験

面接受験社数は、37.2%の学生が「6～10社」と回答し、次に多い「1～5社」と合わせると64.9%となります。既に進路を決定し活動を終了している学生が約8割であることを考慮すると、多くの学生がこの範囲内で内定を獲得していることになり、非常に高い選考通過率であることが窺えます。



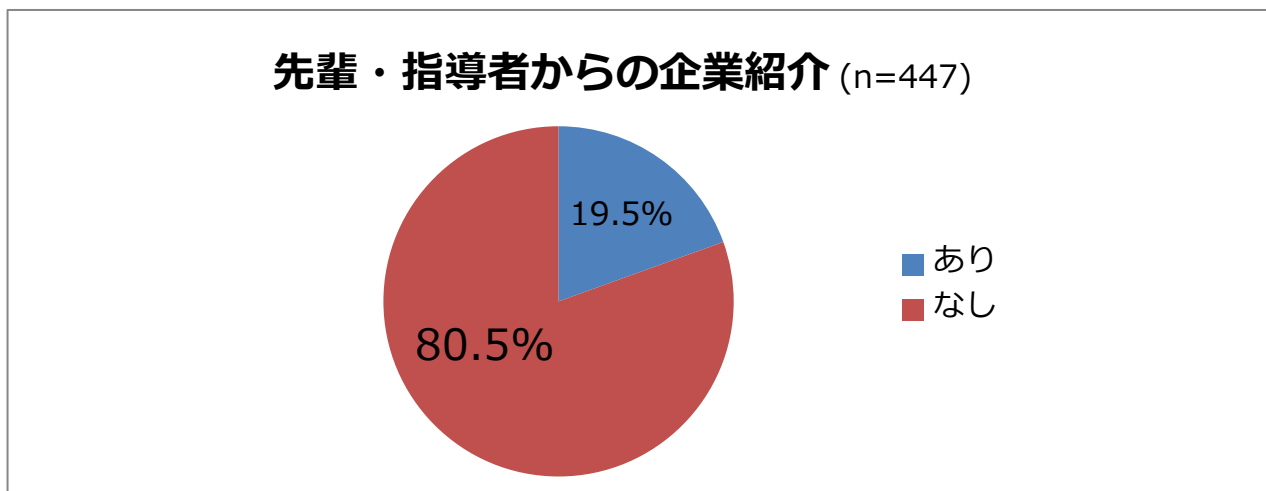
**(17)内定社数は「1～2社」で6割超、早く部活動に戻りたい体育会学生**

内定保持者に、その社数を尋ねたところ「1社」が36.3%、次いで「2社」が28.1%となり、合計すると64.4%となりました。引く手あまたの体育会学生ではありますが、夏には合宿、秋からは最後のリーグ戦を控えている部活も多く、1日でも早く進路を決めて部活動に復帰したいと考える傾向があるようです。とはいえ、安易に進路選択をしているわけではなく、彼らは自分で考え決断したことについて責任を持ち、行動することができるため、ミスマッチによる早期離職などは少ないと考えられます。



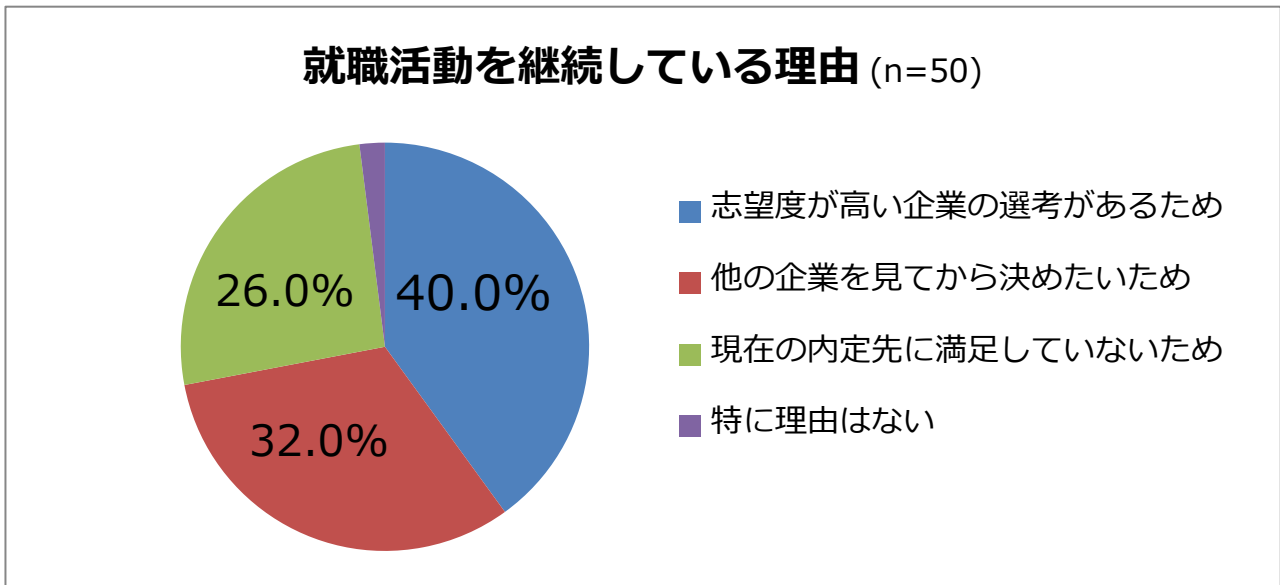
**(18)約2割の体育会学生が部活動のネットワークを活かして選考に参加**

応募企業の選定において、先輩・指導者の影響が強いことも体育会学生の特徴です。19.5%の学生が部活動の先輩・指導者から企業の紹介を受け、選考に参加したと回答しています。普段から学生の練習ぶりを見てきた先輩・指導者だからこそ、自信を持って紹介ができ決定率も高いです。競技レベルの高い部活・メンバーほど練習やその他活動に時間を取られることが多いため、このような形で効率的に就職活動を行うことで、部の強化にもつながっていると考えられます。一方、自らの力で活動をする必要がある部活の場合、主将・主務といった役職者が立場上、練習を休むことができないといった問題が発生しています。



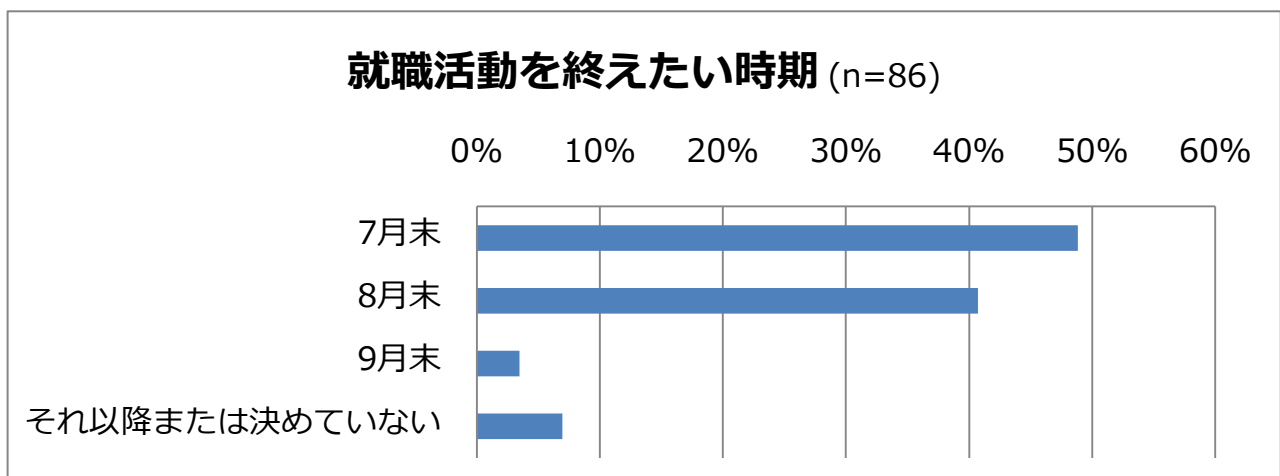
### (19)内定獲得後、よりよい環境を求めて活動を継続する体育会学生

全体では約1割となりますが、内定を保持しながら活動を継続する体育会学生もいます。その理由は「志望度が高い企業の選考があるため」が40.0%でトップとなりました。これまでの経験から、体育会学生は環境が自らの成長・パフォーマンスに大きな影響を与えることを知っています。妥協せず、内定を獲得した企業が自分にとってベストであるのか、その組織に貢献できるのかを常に自問自答している姿が浮かんできます。



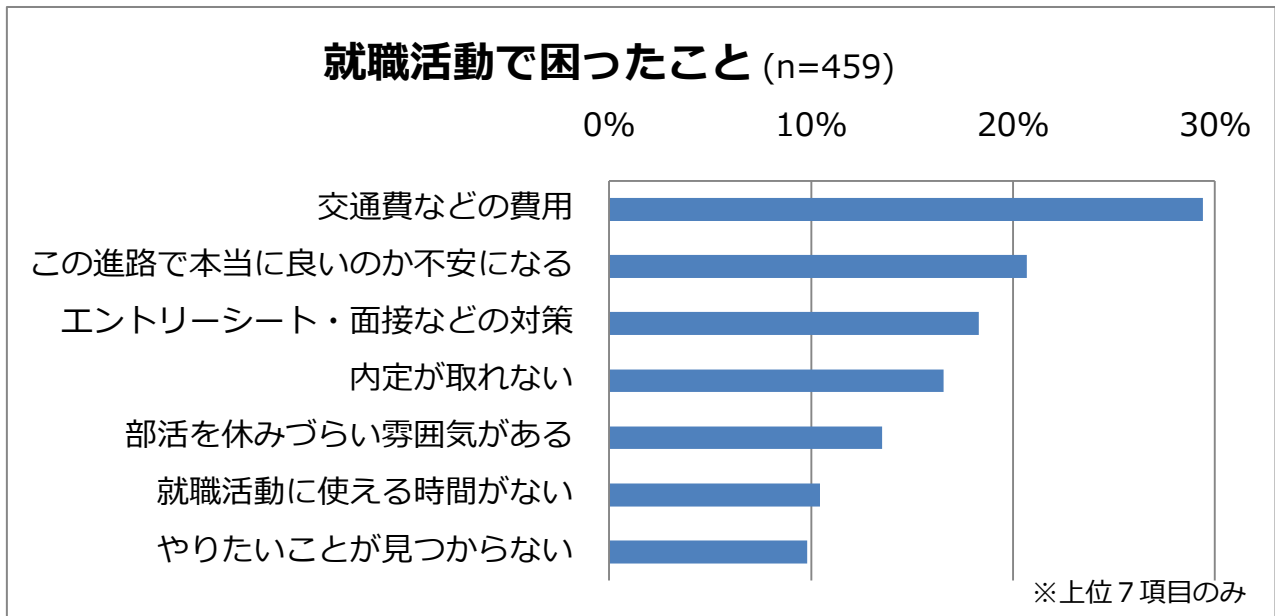
### (20)就職活動を終わりたい時期は「8月末まで」で約9割

就職活動を終わりたい時期は「7月末まで」が48.8%、「8月末まで」が40.7%となりました。7月は大学の試験、8月は合宿という学生が多いため、できる限り早く活動を終わりたいという意思が感じられる結果となっています。選考には通常1~2ヶ月程度かかることを考慮すると、既に選考が進んでいる企業の結果を待つ最終判断したい、というケースが多いと考えられますが、この時期は短期間で選考を行う企業もあり、最短1~2週間で内定まで進むこともあるようです。



### (21)就職活動で最も困ったことは「交通費などの費用」

体育会学生が就職活動において最も困ったことは「交通費などの費用」が29.4%でトップとなりました。グラウンドなど施設の関係から、体育会学生の活動場所は郊外であることが多く、そこから受験先企業のある都心まで移動すると、首都圏の学生でも往復で2,000円程度かかることも珍しくありません。アルバイトをしていない学生にとっては、非常に大きな出費となっていることが窺えます。



### (22)後悔していることは「もっと早く準備をしておけば良かった」

28.6%の学生が、もっと早い段階で準備をしておけば良かったと後悔しています。引退する前から卒業後のキャリアについて深く考え、準備することで希望進路の実現可能性が高まるという事実を、これから活動を始める3年生だけでなく、1～2年生にも伝えていく必要性を感じます。

